

小屋場只々

目次

1. トピック
2. お知らせ
3. 経営戦略から読み解く知財戦略 (18)
M E C E
4. 経営者の本棚の片隅に
株式会社部ビジネス教育出版社
SWOT分析による戦国武将の
成功と失敗
森岡 健司 著

2013年3月20日 撮影

山口県大津島 小屋場只々のテラスとテラスから望む
回天訓練基地跡



小屋場只々をご存じでしょうか? 「こやばただただ」と読みます。
山口県の瀬戸内海に浮かぶ大津島という島にあり、徳山駅前の徳山港から船が出ています。

へんてこりんな名前ですが、1日1組限定の宿で、外観はコンクリートと木材を使って建てられたおしゃれな一軒家のような造りで瀬戸内海に面したリビングの窓は巨大なガラス張りで静かな海を見渡すことができます。リビングの外には板張りのテラスがあって、ちょうど猫が寛いでいました。

そして、壁には暖炉が直接設けてあって寒い季節はパチパチという音も楽しむことができます。また、海が見える大きなガラス張りの窓がある内風呂の他にも露天風呂が少し離れた茶小屋の傍にしつらえてあり、どっちの風呂も開放的でのんびりお湯に浸かることができます。露天風呂は昔懐かしい五右衛門風呂で底に木の円板を沈めてその上に足を置いて入ります。

リビングにはコーヒーのドリッ器具やCDプレーヤーがあって寛ぐことができますがテレビがありません。手持ちぶさが気になる場合には読もうと思っていた本などを持っていくといいと思います。でも、せっかくなので大切なパートナーとコーヒーを淹れて飲みながらまったりするのがいいんじゃないかと思えます。

寝室には大きめのベッドが2つ揃っていてゆっくり休むことができます。瀬戸内の島の夜はとても静かです。

そして、食事ですが、1日1組限定なので専属となる料理人による新鮮な魚介をふんだんに使った和食をいただけます。ダイニングからも海が見えて美味しい料理とともに至福の時間を過ごすことができます。

ただ1つ問題は、予想がつくと思いますが平日でも2人で8万円を超える宿泊費です。まあ、1日1組限定なので仕方ないとも思うのですが、記念日等特別な日に勇気を出すしかありません。

大津島は人間魚雷「回天」の訓練基地跡が残っていて、そこまで歩いてでも行くことができます。途中トンネルがあってそのトンネル内にも回天に関する展示がありタイムスリップするような感覚もあります。そして、近くには回天記念館があり、回天の模型や回天で命を落とした搭乗員の遺影、遺品などが展示されています。小屋場只々でのんびりしようとしている自分が恥ずかしくなるような若者の純粋で一途な気持ちと潔さと大きな悲しみや無念にも触れることができます。つくづく平和の大切さを考えさせられますので、是非お立ち寄りください。

編集・発行 維新国際特許事務所
山口オフィス：〒753-0077 山口市熊野町1-10 NPYビル1F
TEL: 083-901-2233 FAX: 083-901-2266
広島オフィス：〒730-0052 広島市中区千田町3-13-11
広島発明会館2F
TEL: 082-207-2312 FAX: 082-207-2314

2. お知らせ

●特許庁各種パンフレットのお知らせ

(出典：特許庁ウェブサイト)

特許庁では、各種のパンフレットを作成しています。特許庁ウェブサイトからダウンロードができますので、ご活用ください。
 なお、法改正等により各種手数料に変更があった場合、パンフレットの作成時期により旧料金での表記がございますのでご注意ください。

<https://www.jpo.go.jp/resources/report/sonota-info/panhu.html>

2021年11月に更新されたパンフレットは以下の2つです。



令和4年4月1日以降
 特許権等の**訂正や放棄の際**
通常実施権者の承諾が
不要になります

権利者の皆様

訂正や放棄の手続きにおいて通常
 実施権者の承諾書の提出の負担
 が軽減されます

通常実施権者の皆様

引き続き承諾を必要とする場合
 は権利者とあらかじめ取り決
 めておくようライセンス契約等
 の実施をお願いします

特許庁

【事例から学ぶ 意匠制度活用ガイド】

「意匠権に期待される効果」を切り口に、デザイン保護の中心的な役割を果たす意匠制度の活用方法について、具体的な事例を基に紹介します。

https://www.jpo.go.jp/resources/report/sonota-info/document/panhu/jirei_katsuyou.pdf

【訂正審判等における通常実施権者の承諾要件の廃止に関する制度周知リーフレット】

https://www.jpo.go.jp/resources/report/sonota-info/document/panhu/teisei_shinpan.pdf

●「スタートアップ×知財戦略」についてのご案内

(引用：特許庁ウェブサイト)

特許庁では、知財の観点からスタートアップの成長をサポートしていくため、スタートアップ向けの各種施策をご用意しているほか、知財戦略事例集などの役立つコンテンツを提供しています。

<https://www.jpo.go.jp/support/startup/index.html>

起業をお考えの方向けに、スタートアップが知るべき知財のチェックポイントと手続きや、知財のメリット等、様々な情報が掲載されています。

また、スタートアップに不可欠な知財戦略に関する基礎知識や支援施策、イベントなどの最新情報を集約した知財コミュニティポータルサイト「IP BASE」<https://ipbase.go.jp/> も開設されています。

起業をお考えの方は、ぜひ、ご活用ください。



●弊所 Patent マートへの情報掲載(無料)のご案内

弊所では、特許権・実用新案権・意匠権を出願取得されたお客様を対象に、権利活用の促進を目的とした独自の特許流通市場を、弊所インターネットサイトにおいて無料で公開するサービス (Patent マート) を行っております。

この Patent マートは、特許権等に関する情報を公開することで、その利用や譲渡を希望される権利者様と他の企業様との間の権利売買やライセンス契約等のマッチングの場を提供するものです。

Patent マートへの掲載をご希望の場合は、弊所HPの Patent マートページにある「登録をご希望の方へ」から応募フォームのダウンロードが可能です。入力後にメールに添付いただき、弊所まで送信いただけますようお願い申し上げます。(<https://www.iipi.jp/patentmart>)

応募フォームを受領致しましたら、折り返し弊所より確認のご連絡をさせていただきます。

3. 経営戦略から読み解く知財戦略(18)



MECE

1. はじめに

これまで、経営戦略については数多くの論文が発表され、経営戦略フレームワークと呼ばれる型（パターン）も数多く存在しています。経営者であれば誰しも経営戦略について、フレームワークを用いて検討・策定された経験があると思います。しかしながら、知財戦略はどうでしょうか？あまり考えたことがないと感じる方が多いのではないのでしょうか？そこで、このコーナーでは代表的な経営戦略フレームワークを起点として知財戦略を読み解いてみたいと思います。

2. MECE

MECE（ミーシー）はMutually Exclusive and Collectively Exhaustiveの頭文字をとった略語であり、google翻訳によれば、「相互に排他的で集的に網羅的」となるようですが、簡単には「モレなくダブリなく」と言われています。経営戦略フレームワークというよりもごく普通に、様々な行動・業務における、いわゆるロジカルシンキングの基本として意識せずに実行されていると思います。

経営戦略フレームワークではよく2つの要素で4分割したマトリックス図、例えばM.E.ポーターの競争優位の源泉とターゲットの幅、F.コトラの競争位置別戦略における量的経営資源と質的経営資源、ボストンコンサルティンググループのBCGマトリックスにおける市場相対シェアと市場成長率等、また、今月号の「経営者の本棚の片隅に」の欄でご紹介した書籍内で紹介されているSWOT分析も内外要因と強み弱みというマトリックス図に構成されていますが、これらのマトリックス図も元々MECEの考え方に基づくものとなっています。

また、マトリックス図の他にも先月この欄でご紹介した4P分析や4C分析も漏れなくダブらないようにそれぞれの指標（要素）を明確化してそれらの指標に基づいて分析を行うものとなっています。常に4つのPやCを念頭に分析することで漏れをなくすということになります。物事を考える際に、漏れや重複があるかないかは、特に漏れの場合自分でないはずと思っても、時間が経って考えてみると、やっぱりあったということはよくあると思います。大事なのは、予めMECEの方針に沿って考える際に漏れないようなチェックリストのような、すなわちフレームワークを準備しておくということだと思います。このことで実際の行動時に特に漏れない考えが可能だと思います。

3. 知財戦略

さて、知財戦略としても当然MECEの考えに沿って知的財産権の取得を行わなければなりません。研究開発中に生じた有用な発明については、漏れのない状態で特許出願を行います。その際まず検討しなければならないのは、最初の基本発明から派生する周辺発明、改良発明、そして応用発明です。例えば、基本発明として駆動装置を発明したとしますと、それが基本発明となり、その駆動装置の制御、製造、保管、メンテナンスの観点からの装置や方法に関する発明が周辺発明となり、駆動装置自体の改良を行えば改良発明となり、その駆動装置を利用したそれ自体が移動する移動装置、駆動装置を用いて何かを移動させる運搬装置、それらを用いた物流システム等が応用発明となります。これらを網羅して出願権利化することでいわゆる強い特許とすることが可能となります。

企業の知財部にいた頃、技術部門にこのような周辺発明や応用発明を思いついてもらうための一覧表を作成して配布していました。当時はMECEという語を知らなかったが、権利を点や線ではなく面で取得するという心を掛けていたので、考え方としてはMECEに沿っていたのだと思います。中小企業ではなかなか複数の特許で権利の網掛けを行うのは費用対効果の観点から否定されがちと思いますが、たった1つの特許では、たとえ抜け穴のない(MECE)特許であっても回避され易いのですが、それが周辺発明も含めて3、4つとなるとすべて回避するのも難しくなり、競合社も諦める可能性が高くなります。ある程度まとまった形での知財武装が大切です。

さらに、特許等の技術的な知的財産権のみならず、意匠権による商品自体やパッケージデザイン、店舗等のレイアウトの保護、商標権による商品やサービスのネーミングの保護やブランディング等も含めて多面的に武装する、いわゆる「知財ミックス戦略」も中小企業の中で脱下請けという課題解決の切り札として注目されています（日経2021年9月17日付け記事）。

なお、特許法には、「一の請求項に係る発明と他の請求項に係る発明とが同一である記載となることを妨げない。」というMECEに反すると感じられる条文（特許法36条5項）があります。この規定によってひとつの出願においては、同一の発明を別個の請求項として表現できることとなります。一言一句同一記載の請求項が2つという状態はないと考えられますが、発明をどのように捉えて表現するかというのは出願人あるいは代理人の裁量によりますので、複数の実施例を明細書で説明した場合に、それぞれの実施例に対応させて、あるいは跨って表現した発明が実質的には同一であるという可能性はありますし、最近では産業のソフト化もあってシステム、プログラム、方法に関する発明もカテゴリーを超えて実質的に同一となるケースもありますので、意義のある条文であると言えます。

4. 経営者の本棚の片隅に



SWOT分析による戦国武将の成功と失敗

森岡 健司 著

株式会社ビジネス教育出版社
2021年10月8日 初版第1刷発行

画像出典：amazon

著者の森岡健司さんは、1972年大阪府生まれの中小企業診断士でいらっしやいます。本書の紹介によりますと、中学1年生で、MSX版の歴史シミュレーションゲームに出会って、戦国時代の面白さに目覚め、小説や漫画、図説シリーズの戦国ものに傾倒し、もしも自分が戦国武将だったならという妄想に浸っていたそうです。現在では、中小企業診断士として企業の経営支援と並行しながら「戦国SWOT」に関するオンラインセミナーの講師を務め、中小企業診断士の協会会報誌などへの執筆を行っているそうです。

本書では戦国時代の武将と現代の経営者を重ねつつ、SWOT解析を用いながら戦国武将がいかに成功し、失敗したかが解説されています。「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」といいますし、「歴史は繰り返す」ともいいます。私自身は根っからの理科系で世界史も日本史も興味があまりなかったこともあって、歴史に学んだという記憶がなく、常に経験からしか学んでいないように思います。本書を機に、まあ、時既に遅しかもしれませんが学んでみようと思いました。

本書は、第1章戦国武将たちの事業承継「偉大な先代を継ぐ二代目の成功と失敗」、第2章戦国武将たちのマーケティング「戦国時代のブランディングの成功と失敗」、第3章戦国武将たちの組織と人事「意思決定権がないリーダーの成功と失敗」、第4章戦国武将たちの生存戦略「小勢力の独自戦略の成功と失敗」の4章からなっています。

各章ともに武将の家系図や年表が添えられていて、武将の動きや時代背景がわかるようになっています。

第1章の冒頭の武田勝頼は四男でありながらイレギュラーな形で後継者に指名され、偉大な父から受け継いだ有能な家臣や他家とのネットワークに恵まれていたにも関わらず、長篠の戦いで敗れ、結局武田家を滅亡させられてしまうという悲劇に見舞われています。決して無能でないと書かれていますが、武勇には優れていても家臣団に対するリーダーシップとマネジメント能力が不足していたのではないかとというのが著者の見立てのようです。

また、長篠の戦いの後、北条家との同盟関係を裏切ったように見える行為が外部組織との対立というSWOTでいう外部環境の脅威(T)を招いたのみならず、内部組織の弱体化というSWOTでいう内部環境の弱み(W)を招く結果となってしまいました。

一方、第2章で紹介される立花宗茂は、私は聞いたことがない名前ですが、なかなか興味深い人のようです。九州筑後の名族であった高橋家に嫡子として生まれ、娘婿として入った立花家で義父から高度な教育を受け後継者となります。義父から受けた教育は武術のみならず、芸術や書道、茶道にも及んだようです。この武将がすごいのは鹿児島を本拠とする島津家による猛攻が激しくなってきたころ、相次いで義父、実父を失いながらも父親が家臣だった大友家を守るべく島津家と戦い抜いた点です。豊臣秀吉の九州征伐軍の到着もあって島津家を抑えることができたようですが、豊臣秀吉が忠義を称えるように人間性に優れた武将のようでした。その後の関ヶ原の戦いで家康から誘われても秀吉からの恩義を忘れることなく勝ち目のない三成派につくという徹底ぶりでした。著者の森岡さんも指摘されていますが、この「忠義」が宗茂に対するキーワードのようです。圧倒的な内部環境の強み(S)ですね。

戦国武将も皆人間であり、明日の命も知れない、現代とは比べ物にならないくらい厳しい時代を生き抜いていかなければならなかった極限状態において、信じるのか疑うのか、信義を尽くすのか裏切るのかという究極の選択の連続であったと思います。彼らの選択の是非は一概に決められませんが、現代の経営者を取り巻く環境も程度は違えど似ているところもあると思います。歴史をひも解いてちょっと考えてみませんか？

本書を本棚の片隅にいかがでしょうか？